

## 2010年モスクワ滞在の報告1 「イタリア」賞：詩人イワン・ヴォルコフ

北海道大学スラブ研究センター GCOE 共同研究員 前田しほ

報告者の前田は、2009年12月より日露青年交流センターのフェローシップを受給し、ロシア人文大学に研究生として留学中である。思わぬ幸運に恵まれ、「文学の諸問題」誌編集者のイリーナ・コワリョワ氏に、モスクワの文学界を案内されることとなった。大学の講義に刺激を受ける一方で、各種文学賞の記者会見・授賞式を観覧、文学誌・出版社の編集室を訪問したり、作家に面会したりと、短い滞在期間で期待以上の成果を得ている。この滅多にない幸運を享受するのが自分だけというのは、いかにももったいないので、記憶が新しいうちに、2010年のモスクワの文学界の様子をレポートしたい。

### 1

その記念すべき第一回は、2010年3月25日（木曜日）、優れたロシア詩人とイタリア語翻訳家におくられる「レピチペアーモスクワ」賞の授賞式を取り上げたい（以下、「イタリア」賞と呼ぶ）。この文学賞はモスクワ・イタリア大使館が主催し、本年は3回目ということである。授賞式の司会進行、スピーチ、さらに詩の朗読までイタリア語・ロシア語の通訳を介して行われるという徹底ぶりであった。

会場は、地下鉄タガンスカヤ駅から徒歩10分の外国文献図書館楕円形（オヴァリヌイ）ホールである。ニコロヤムスカヤ通り1番地に位置するこの図書館は、外国の文献が幅広く所蔵されているほか、国際交流基金文化事業部（モスクワ日本文化センター）が入っているので、よく知られた場所だろう。が、会場のホールには、裏の中庭から入るので、少し分かりにくい。入り口には「出入り自由」との張紙があったが、招待状が出回るのは関係者のみであるから、参加者も互いに顔見知りである。天井近くまで書棚がそびえるこのホールは、その名の通り「楕円形」で、品格があり、2月のベールキン賞授賞式も会場としていた。

夕方6時の開会に余裕をもって会場に到着したが、イタリア語の会話ばかりが聞こえてくる。知人も見当たらないし、手持ち無沙汰ということもあって、早々に場所を確保し、バイオリンとピアノの生演奏を聴くことにした。すると、最前列に見知った顔が現れた。しかし、どこで紹介されたのかも、名前も、どうしても思い出せない。が、後で審査委員の挨拶で、名前を知った。レフ・ルビンシテインである。これはどこかで写真を見て知っていたのである。それに後でよくよく考えてみれば、ほかのイベント会場でも頻繁に見かけていたのであった。ちなみに、今回の本年度の審査委員は、ルビンシテインのほか、ジョヴァンニ・ペッリノ（委員長、イタリア大使館次官で、自身も詩人だという）、マクシム・アメリン（ロシア詩人）、イリーナ・エルマコワ（ロシア詩人）、ジュザ・ランチニ、ヴィ

クトル・クッレ（イタリア詩翻訳家）、エヴゲニー・ソロノヴィチ（イタリア詩翻訳家）であった。

さて、授賞式とは「えらい」人の挨拶から始まるものであるが、今回は、イタリア大使、外国文学図書館長、イタリア文化研究所長（翌日の「朗読会」の会場である）、「イタリア」賞会長とつづき、全てに通訳が入るので、なかなか本番にたどりつかない。が、陽気なスピーチがつづき、聴衆を飽きさせないのはさすがである。そして、ロシア人詩人としてイワン・ヴォルコフ（1968年ー）、ロシア詩をイタリアに翻訳した功績を称えて現代ロシア詩研究者のクラウヂヤ・スカンドゥラ、そして死後贈呈の特別賞が詩人で文学研究者のタチヤーナ・ベク（1949-2005年）に贈られた。それぞれの挨拶と詩の朗読が行われた。ヴォルコフのスピーチは、ベクに師事していたということで、心のこもった感動的なものだった。が、受賞者たちは感激のあまり、通訳の存在を忘れてしまい、周囲に止められるというハプニングが何度もあった。またスカンドゥラの翻訳で、近いうちにチムール・キビロフの全集が出版されるという。翻訳家はえてして作家の影に隠れてしまいがちだが、その仕事は大変な労力を要する。それがこうして表舞台で表彰されるというのは、翻訳者にとっては大きな励みである。



授賞式（外国文献図書館）

プログラムの合間に生演奏が3度入り、またえらい人たちの挨拶が繰り返されるころには、さすがに疲れた雰囲気が漂いはじめ、ぼつぼつと中座する人たちが現れた。ようやく最後の挨拶が終わり、奥のホールに招かれて、料理が振舞われ、文学界の交流が始まる。みな慣れていて、すばやく美味しそうな料理とワインを確保する（さすがイタリア大使館主催なだけあって、大変美味しいイタリア料理が振舞われた）。ベールキン賞のときは、有名作家や批評家たちに目が眩み、ご挨拶に夢中になっていたら、イクラを取り損ねたので、私もこの日はさっそくテーブルに群がる群衆の一人となった。おしゃべりはその後である。文学賞の記者会見や授賞式の際には必ずこうした社交の場が用意されていて、関係者が旧交を温めたり、情報を交換する。こうしたイベントには、作家だけでなく批評家、ジャー

ナリスト、出版関係者、文学関連イベントのオーガナイザーなど大勢の関係者が集まるので、人に紹介してもらったり、親交を広げるのに絶好の機会である。この日の客はやはりイタリア関係者と詩人が多かった。遅れて現れたコワリョワ氏に若い詩人たちを紹介してもらったが、現代文学研究をしていると聞いて、散文？詩？と顔を輝かせて問われると、散文と答えるのは、いかにも気が重い。しかし、一時的にがっかりされても、自分には詩を解する才能がないのですと正直に答えるのが、やはり一番罪がない回答である。

## 2

翌日 26 日は、地下鉄クラスヌイエ・バロータから徒歩 5 分のイタリア文化研究所で、「ロシアーイタリア詩の架橋」と題しての受賞を記念する朗読会が行われた。こちらも出入りは自由な公開イベントであるが、情報が流れるのは関係者中心であるのがネックである。お互い知り合いらしい集団の中で、見知った顔がいないと、「アウェイな気分」で居心地が悪いものである。よく知った人に案内されるのが一番気楽であるが、「アウェイな気分」を押し殺して、図々しく顔を出し続けると、なんとなく居ても自然な雰囲気になってくる。



朗読会（イタリア文化研究所）

さて、開会は 5 時半であったが、これも少し早めに会場に入り、モスクワ滞在中の稚内北星学園大学の岩本和久先生とともに、前から三列目という好ポジションを確保した。しかも、朗読会が始まってみると、詩人の立ち位置のまん前である。予定時刻が過ぎると、狭い会場はいっぱいになり、新たに椅子を搬入しても間に合わず、廊下まで人が溢れた。

ここでは、ロシア詩人とイタリア詩人の詩が交互に朗読された。同時に、スカンドゥラの翻訳と、イタリア詩の翻訳家であるクッレ、ソロノヴィチらによる翻訳の朗読が行われた。中にはこの日のためにわざわざ用意した翻訳もあったようである。関係者の熱意に脱帽するばかりである。基本的にロシア詩人は本人が朗読、イタリア詩人は代読の形で進められたが、注目すべきは、ロシア詩人が一流そろいで、非常に贅沢な時間を過ごした、と

ということである。ミハイル・アイゼンベルグ（1948年ー）、マクシム・アメリン（1970年ー）、エヴゲニー・ブニモヴィチ（1954年ー）、イリーナ・エルマコワ（1951年ー）、チムール・キビロフ（1955年ー）らが並んだ（残念ながらオリガ・セダコワは現れなかったが、詩人や作家がプログラム通りには現れないのも常である）。いずれも、ソ連時代には国内では出版できず、1980年代末から活躍しだし、今では人気実力ともに一流の詩人たちである。ユネスコの指定した3月21日「世界詩の日」を記念して、3月後半はさまざまなイベントが企画されたが、中でもトップレベルの豪華な顔ぶれということができる。また、主催者たちが大変熱心で、授賞式・朗読会ともに和気藹々と進められ、大変暖かい、気持ちのよい雰囲気が演出された。



朗読するヴォルコフとスカンドウラ

3

そして最後に受賞者のイワン・ヴォルコフが登場した。イワン・ヴォルコフは、1968年モスクワ生まれ、現在コストロマ在住である。「ズナーミャ」、「オクチャブリ」を中心に詩を発表している。3篇の詩を読んだが、詩人の了承を得て、朗読の録音ファイルが公開できることとなった。快く了承し、貴重な原稿を提供してくれた上、筆者のつまらない質問に丁寧に対応してくれた詩人に、この場を借りて、感謝したい。ファイルに収録したのは『オーダ：2010年ズラブ・ツェリテリによるコストロマ占領に寄せて』である。この詩は2010年1月にウクライナの有力文芸誌「シヨ IIIo」に発表された。「シヨ」自体がロシアでは手に入りにくい文芸誌であり、しかもネット上でも公開されていないため、聴衆にとって初めて聞くものであった。

『オーダ』は、ロモノーソフ、プーシキン、レールモントフ、ブロークの詩を下敷きにしており、いずれも教養あるロシア人にはすぐにそれと分かるもの（らしい）が、筆者には、『青銅の騎士』のパロディくらいしかぴんどこなかった。翻訳にも、その不勉強振りがよく表れているだろうが、ご容赦いただきたい。個人的には、グローバル化が進む現代のロシア社会と知識人の反応を映す鏡として、興味深く聞いた。現代美術の権威ツェリテリが物笑いの種になっていることもあって、会場の笑いを誘っていた。録音ファイルにはそ

うした聴衆のリアクションも汲み取れる。

この詩では、周囲の景観にそぐわないことで有名なツェリテリの記念碑が痛烈に批判されている。ご存知のように、モスクワ川の傍らにそびえる巨大記念碑は物笑いの種である。さらにツェリテリは、首都だけでなく、地方にも記念碑を建造する計画を立てている。ソロフキでは、ユネスコの反対で不首尾に終わった。そして今度目に付けたのが、詩人が暮らすコストロマである。「黄金の環」にも数えられる古い美しい町に、2013年のロマノフ王朝生誕400周年を記念して、ピョートルI世像を建設することを思いついた（今のところ計画の目途はたっていないという）。ツェリテリは、市長や大統領など有名な政治家の彫像を作ることで知られているが、特にピョートルI世を好む。よって、プーシキンの詩『青銅の騎士』の主人公は、青銅の騎士＝ピョートルによってペテルブルグを追われるだけでなく、今や、ロシア全土を覆い尽くす記念碑群によって追われることになる。こうして、ヴォルコフは、ピョートル像に代表される権力者像を熱心に製作し、有力者におもねる大芸術家を辛辣に風刺しているわけである（さらにいえば、これらの巨大記念碑建設、公共事業をめぐる政・官・業の癒着の舞台となっている）。

せっかくであるので、大雑把であるが、『オーダ』を訳出した。拙いものであるが、詩を楽しみ助けとなれば幸いである。

## オーダ：2010年ズラブ・ツェリテリによるコストロマ占領に寄せて

1

おお、キッチュとグロテスクのミューズよ  
牙をそっとむいておくれ！  
大胆不敵なユネスコが  
ソロフキ奪還して以降、  
歴史的建造物のたつ辺鄙な田舎の  
戦略的重要性とやらが高くなる  
（迷える羊そっくりだ）  
抗議活動がピョートルI世像の進出に影をおとす

2

おお、あなたが我々をあざけること  
我々を憎むことはなはだしい  
美術愛好家は雲の下で川を、  
教授は地盤の数字をひねくりまわす！  
地形に、地盤に、ヴォルガ河のせいで、  
エコロジストに、ダム業者に、地質学者、

誰もが一片の土地をめぐって値切りあったもの。  
しかしビジネス・プランの展望が開け、  
古強者に、ギャングに、徴税人は後退した。

### 3

PR連盟と袖の下は  
(歓喜が思いがけず知性を虜にする)  
アルカイダと NATO よりも強大。  
口ひげを逆立てたあばた面、  
鑄鉄-ブロンズ製の大群は  
紙切れの隊列を踏みにじる。  
それは熱狂的な建築家=支持者に、  
貯蓄家に、  
グリーンピースの群れ。

### 4

歴史家は地図を広げる。  
ピンの小旗を突き刺す。  
ボナパルトの鼻面をねたんで  
火星人が進軍する  
中央から地方へと楔隊形をとって。  
よって守備隊を配備する  
そして景観をコントロールする。  
駆けよ、エヴゲニー、でもいったいどこへいこうというのだ？  
無用の長物たる群像に  
景観が正されることのないところ。

### 5

哀れな愚か者、今度は  
どこへ足を向けるのか？  
彼の背後はどこもかしこも青銅の騎士の足音  
ツァーリの猟犬の群れ  
おお、ツェントネルとトンのミューズよ！  
ロボット隊を讃えよ、  
鼻の穴を広げ、口ひげを逆立て、  
彼らは世界中を、喜んで世界を

売り出し前のフラットのように、  
一通り設備を整える。

## 6

彫像に賛成票を投じた  
国会議員専用の地獄にて、  
流れる排水の芳香のなか  
砂糖漬けフルーツとレーズンが配られる。  
どのチャンネルも「ニュース」ばかり  
しかしツアーリの復活より  
酷い復讐はない。  
台座から妖精は降りて、  
束の間情熱に燃えて  
国民の僕を大事に抱きしめる。

別の地獄では、  
マヨネーズ缶の中に  
ぎゅうぎゅうづめの魂が  
緑青の臭気漂う中に  
作家に住みつく、シラミのように……。  
その代わり斥候ロケットは  
自分の惑星に帰還して、  
川沿いのパトロールに気づき、  
ヒューマノイドに驚く、  
今後は二度と損なわれた大地に悩むことはないだろう



ヴォルコフ、著者、オクサーナ夫人

## Ода

на взятие Костромы Зурабом Церетели 2010 года

1

О, Муза кича и гротеска,  
Оскаль-ка ласково клыки!  
С тех пор, как дерзкая ЮНЕСКО  
Отвоевала Соловки,  
Нам стратегически дороже  
(На блудую овцу похоже)  
Провинциальная дыра  
Уже застроенного места.  
Мрачили акции протеста  
Распространение Петра –

2

О, как смеялись вы над нами,  
Как ненавидели вы нас:  
Эстет с рекой под облаками,  
Профессор с цифрами из баз!  
Из-за ландшафтов, почв и Вóлог  
Эколог, гидровед, геолог –  
Все торговались за куски;  
Но приоткрылись бизнес-планы,  
И отступили ветераны,  
Бандиты, налоговики.

3

Союз PR'а и отката  
(Восторг незапный ум пленил)  
Сильней Аль-Каиды и НАТО –  
Не то што штампов и чернил!  
Топорща ус, корявя морды,



Чугунно-бронзовые орды  
Сомнут бумажные ряды  
Ревнителей архитектуры  
И сберегателей природы  
Гринпис-кабацкия орды.

4

Историк раскрывает карту,  
Втыкает красные флажки:  
На зависть москве Бонапарту  
Прут марсианские полки  
Свиньёй из центра в регионы  
И расставляют гарнизоны,  
И контролируют пейзаж.  
Беги, Евгений, но куда же?  
Где не загажены пейзажи  
Кумиром, вышедшим в тираж,

5

Куда теперь безумец бедный  
Направит беглые стопы?  
За ним повсюду топот медный  
Царей легавья толпы.  
О Муза центнера и тонны,  
Воспой же роботы-колонны,  
Кругля ноздрю, топорща ус,  
Они весь мир, на радость миру,  
Как предпродажную квартиру,  
Обставят на казенный вкус.

6

В Аду для депутатов Думы,  
Голосовавших за статуи,

Дают цукаты и изюмы  
С благоуханьем сточных струй,  
По всем каналам только “Вести” –  
Но даже там нет хуже мести,  
Чем оживание царя:  
Слезает с пьедестала нежить  
Слугу народа тискать, нежить,  
Мгновенно страстью возгоря;

7

А в тесноте другого Ада,  
В майонезной баночке души  
Патйной тронутые чада  
Живут на авторе, как вши...  
Зато разведчики-ракеты  
Вернутся на свои планеты,  
Вдоль рек заметив патрули,  
И офигевший гуманоид  
Отныне не беспокоит  
Обезображенной Земли.

(2010年5月6日)

※本報告は、日露青年交流センター「2009年度若手研究者等フェローシップ」の助成による研究成果の一部である。